

第八回

アレクサンドル・ソルジェニーツィン 『イワン・デニーソヴィチの一日』

今回は中編小説を読みます。これはある無名作家のデビュー作ですが、文字通り、世界を揺るがす作品となりました。一編の小説がこれほど大きなセンセーションを引き起こしたことはない、と言えるほどの衝撃を世界にもたらしたのです。

ロシア文学と人間の尊厳

人間を尊ぶ態度、人間は尊い存在だという考えは古今東西にあります。とくにどの国から広がったというのでもなく、世界のあちらこちらで生まれたものでしょう。

この考えを根拠づけようと、さまざまな物語や説明が作られました。有名なのは、旧約聖書『創世記』の冒頭でしょう。「神はご自分にかたどって人を創造された」(新共同訳1.27)。「主なる神は、土(アダマ)の塵で人(アダム)を形づくり、その鼻に命の息を吹き入れられた」(同2.7)。全能の神が「自分にかたどって」、かつ「鼻に命の息を吹き入れ」て人を創ったという二点が、人間が尊い存在であることの根拠となります。他の動物同様、土から作られた被造物ではあっても、人間は神との特別な「近さ」を持つのです。

近代について言えば、フランス革命の人権宣言(「人間と市民の諸権利の宣言」1789年)に代表されるように、「人権」という概念が生まれ、人間の尊厳を説明するための根拠となりました。宗教的枠組によらずに人の尊さを根拠づけ

ようとする点、また民族や身分でなく「個人」を単位とする点に、近代的人権の特徴があります⁵⁷。

この場合、神との近さや特別な共同体への帰属によるのではなく、また能力や年齢、性別によるのでもなく、ただ一人の個人であることをもって人間は尊いことになります。これは画期的思想であり、近代が後発国をもっとも驚かした点です。というのも、ほとんどの後発国では身分制が残っており、人間の尊さを身分によって区別するのが当然でした。貴族が農奴の人間性を尊ぶ、武士が農民の人間性を尊ぶということは考えられなかったのです。しかし、個人の概念に基づく近代的人権は、その考えられない壁を突き崩しました。

その一方、神や共同体を捨象し、能力や年齢を不問にして、人間の尊さを語ることに、ある種の当惑ないし反発があったことも否めません。先発国の植民地支配などの「理想と現実の乖離」はもちろんですが、たんに思想のレベルだけでも、完全に納得しきれないものを感じた人はそれなりにいたことでしょう。「一人の個人であることによって人間は尊い」という思想はそれほど新しいものでした。

ここでいつものように脱線させてください。今回は、私が教師としていかに未熟かという懺悔話です。2010年代半ば、日本では「子どもの権利」に関する条例がいくつかの地方自治体で否決されることが続きました。新聞でそれを読んだ私はなぜ否決されるのか不思議に思い、授業中、話題にしました。するとある学生が、「子どもは大人たちに養育される未熟な存在だから、人権を制限されて当然だ」という意味の発言をしました。今思い出しても恥ずかしいのですが、その瞬間、私はあっけにとられてしまい、正面から答えることができなかったのです。適当なことを言って、その場を取り繕ってしまいました。その学生には今でも申し訳ないと思います。

私の失態はそれとして、皆さんだったらこの意見にどう応答しますか。賛成でも反対でもよいので、ご自分の意見を考えてみてください。私も、今では自分なりの説明がありますが、それは書かずにおきましょう。

⁵⁷『岩波哲学・思想事典』岩波書店、1998年、813-814頁。樋口陽一「人権」の項目。

この出来事をふり返って思うのは、「一人の個人であることによって持つ人権」という思想は、二十一世紀でもなお、完全な説得力を有していないのかもしれないということです。それは「遅れた人々」がいるからではありません。個人であるがゆえに万人に等しく与えられる人権という思想には、何らかの脆弱性があるからではないでしょうか。それは近代そのものの脆弱性に繋がります。もっと強い概念、強いストーリーによって人間の尊厳を語りたいと考える人々がいてもおかしくないのです。

第一部でゴリキー『どん底』を読んだとき、サーチンのぶち上げる人間賛歌（「にん・げん！ こいつあ——すばらしいや！ 豪勢な音が、するじゃねえか！」）を読みました。どんなに貧しく能力がなくとも、自己決定する個人として生きるかぎり人間は尊ばれるべきだという、近代肯定の言葉です。ただし、その直後に「どん底」の住民の一人が自殺し、サーチンが「せっかくの酔いがさめちまった」と毒づいて劇が終わるところは、近代の理想への後発国の屈折した心理を表しています。

近代的な人間賛歌を書いたゴリキーがソ連という国家を受け入れ、「社会主義リアリズムの父」となったのは皮肉なことです。というのも、ソ連では人権や人間の尊厳の根拠について、集団的原理（党派性・階級性）に回帰したからです。しかし、これはソ連に限ったことではなく、別の集団的原理（民族・人種）に基づいて自分たちの優越的尊厳を語った他の後発国にも共通する傾向です。「近代の超克」を試みた国々でもっとも疑われ、解体されようとしたのが「個人」の概念だったと言えるでしょう。

ソルジェニーツィンの『イワン・デニーソヴィチの一日』が発表されたとき、その衝撃はもっぱら、ソ連文学で初めてラーゲリ（収容所）の実態が描かれたことにありました。と同時に、人間の尊厳という主題があらためて取り上げられた点に、十九世紀ロシア文学の伝統を見出した読者もいました。この小説では、苛酷な収容所で近代的人権を奪われても、なお人間は尊厳に値するかという問いが立てられていました。そして、先発国では想像しがたい答えが示されていたのです。

ソルジェニーツィン 最後のインテリゲンツィア？

アレクサンドル・ソルジェニーツィン(1918-2008)はロシア革命後に生まれ、二十一世紀まで生きた作家です。これまで見てきた作家たちとは、はっきり別世代に属しています。私たちもよく「戦後生まれ」や「震災後生まれ」、「平成生まれ」などの線引きで世代を分けますが、ロシアでも「革命後生まれ」や「戦後生まれ」、「ソ連崩壊後生まれ」などは重要な世代の指標です。

ソルジェニーツィンは、ソ連時代の作家でその名をもっとも世界に騒がれた人物でしょう。デビュー作『イワン・デニーソヴィチの一日』(1962)は世界的話題作となり、ソルジェニーツィンは1970年、ノーベル文学賞を授与されます。デビューして八年でノーベル文学賞を取ったのは、おそらく史上最速でしょう。ただし、当時すでにソ連政府との関係が悪化していたソルジェニーツィンは授賞式への出席を断念せざるを得ませんでした。そのまま国外追放になる恐れがあったからです。彼は愛国者であり、亡命の意思はありませんでした。

先ほど述べたように、『イワン・デニーソヴィチの一日』は二重の読まれ方をしました。一つは、ソ連がそれまで公にしなかったラーゲリの実情を描いたという政治的ないしジャーナリスティックな読まれ方です。もう一つは十九世紀ロシア文学の伝統への注目です。日本の批評家、小林秀雄も「[この]作品はスターリン時代の監獄で得た作者の経験の上に立っているとともに、明らかに、ゴオゴリヤドストエフスキイの貴重な文学的遺産の上に立っていた⁵⁸」と評しています。彗星のように現れた作家を解釈するために、どちらの要素も重視されました。

では、この二つの要素は有機的に結びついたかと言うと、そうはなりません。「二人のソルジェニーツィン」はしだいに分裂を始め、その分裂は読者たちの目に留まるようになりました。

「伝統的なロシア作家」としてのソルジェニーツィンを代表する作品としては『マトリョーナの家』という短編があります。自分より周りの人々を大切に
する農婦の生と死を描いた佳品で、「文学的なソルジェニーツィン」が好きな

⁵⁸ 小林秀雄「ネヴァ河」『新訂小林秀雄全集』第5巻、新潮社、1978年、275頁。

読者が真っ先に挙げる作品です。

その一方、彼はソ連政府と共産党を糾弾し、その「罪」を暴く作品を発表するようになります。この系列の代表作は『収容所群島』(1973-76)です。ラゲリについての長大なルポルタージュかつ百科事典というべき大作です。当然、ソ連国内での発表は不可能で、国外で出版されました。二百人以上の人々の証言と情報提供を基に書かれた作品で、もはや主人公もストーリーもありません。収容所システム、そしてそれを動かすソ連国家の「全体」を描き出すため、ソルジェニーツィンは長編小説のジャンルに見切りをつけたのです。この意味で、彼はすぐれて二十世紀的な作家だったと言えるでしょう。

その後のソルジェニーツィンについてかいつまんでお話すると、1974年、ついに国外追放となり、ドイツ、スイスを経てアメリカに渡りました。アメリカでは民主主義の唱道者としての役割が期待されましたが、パーモント州の片田舎に引きこもりました。彼の目には、アメリカ社会はあまりに物質主義的だと映ったようです。興味深いことに、彼は日本への関心が深く、1982年には来日もしています。講演やテレビ出演の他、お忍びで日本各地を旅行しました。日本は近代化を進める一方、伝統文化と旧来の価値観を大切にしていると称賛しています。近代後発国同士の心理的連帯と見てもよいでしょう。

ソ連崩壊後の1994年には念願の帰国を果たします。直接モスクワに飛ぶのではなく、わざわざウラジオストクからシベリア鉄道で広大な祖国を横断するソルジェニーツィンは、さながら凱旋する預言者のごとく熱狂的に祖国に迎えられました。この時が彼の名声の絶頂だったでしょう。

2000年、大統領に就任したウラジーミル・プーチンがソルジェニーツィンを訪問します。会談後、老作家は若き指導者を絶賛しました。1990年代、政治的・経済的に混乱をきわめたロシアを立て直すには強力なリーダーが必要だという信念に基づくものかもしれませんが、人心をつかむのに長けたプーチンに手玉に取られたようにも見えました。

ソルジェニーツィンは「正義と真実のためには国家との闘いを恐れない」というロシア・インテリゲンツィアの伝統を意識して行動した人です。インテリゲンツィアについては色々な定義があり、ロシア特有の現象と言われたり、左翼的であることが条件だと言われたりしますが、私の考えでは、どちらも違い

ます。インテリゲンツィアはロシア特有の現象というより、「後発国における知識人のあり方」のロシア版と見るべきでしょう。また、左翼的（革命的）であることも、インテリゲンツィアの必要条件ではありません。むしろ一定の保守性——西欧型近代の価値観をすべては受け入れず、自国の道を模索するという意味での保守性——こそがインテリゲンツィアの必要条件です。したがって、スラヴ派の知識人たちもインテリゲンツィアに含まれます。

ソルジェニーツィンはまさにこの意味で二十世紀のインテリゲンツィアでした。私としては「最後の」という形容辞をつけたいほどです。というのも、彼以後の二十一世紀の知識人にとって、「ロシア独自の道」を語ることが困難になっているように見えるからです。これについてはまた後の章でお話しましょう。

『イワン・デニーソヴィチの一日』から

この作品は中編小説なので、主人公は一人しかいません。ストーリーラインも一本です。そのため、あらすじも簡単にまとめられます。

〔あらすじ〕コルホーズ農民のイワン・デニソヴィチ・シューホフは十年の刑期で収容所に入っている。彼は独ソ戦の開戦翌日に徴兵され、前線で戦った。だが、ドイツ軍の捕虜になったせいで、戦後、反逆罪の判決を受けたのだ。今朝、彼は微熱があり、屋外での労働を免除してもらえないか、医療班に掛け合うが、駄目だった。彼の班は建設中の発電所の壁塗りを命じられた。シューホフたちは協力し、思いがけず作業がはかどる。囚人の生活でもっとも大切なのは食事だが、この日のシューホフはついていて、豪華な差し入れのあった囚人の手伝いをしたお礼に、収容所の晩飯を譲ってもらい、二人分食べることができた！ 囚人仲間から質のよい煙草を買うこともできた。故郷の家族のことや刑期のことは考えるが、もう思い悩むというほどでもない。悩んでもしかたのないことだから。今日は全体としてよい日だったと思いつつ、シューホフは眠りにつくのだった。

『イワン・デニーソヴィチの一日』の文体的特徴は、主人公の生活を淡々と描く点にあります。出来事は主人公の視点で語られており、読者は農民のシュ

ーホフに見える世界を読むことになります。シューホフは囚人生活のさまざまな面について自分なりの考えを持っていますが、それらは基本的に一時の物思い以上には深められていきません。しかし、読者は異世界の住人であるシューホフの物思いを読みながら、いろいろなことを考えさせられます。これは一種の異化効果と言えるでしょう。囚人のものの見方が、読者の常識を揺るがすのです。

たとえば、「自由」について囚人はこんなふうに考えます。

囚人は、考えることさえ自由でない。いつも心はおなじ思いに帰り、何度もおなじことを反芻する。マットレスに隠したパンは見つからないだろうか。今晚、医療部へ行ったら、作業免除にしてくれるだろうか。⁵⁹

日が暮れてから、収容所の門をくぐるときほど、囚人が寒さにふるえ、腹をへらしているときは、ほかにない。こんな場合、晩飯の柄杓一杯のスープ、くちびるが焼けるほど熱い、実の入っていないスープは、囚人にはまるで早天の慈雨なのである。だから囚人は、がぶりと、むさぼるようにスープを飲む。このとき、柄杓一杯のスープは自由よりも貴重であり、過去のあらゆる生活よりも、いかなる未来の生活よりも貴重なのだった。⁶⁰

シューホフは、何も言わずに、天井を見つめていた。ほんとうに、今では、自由の身になりたいのかどうか、自分でもよくわからなくなっている。初めの頃は、熱烈に自由にあこがれ、もう何日経った、あと何日残っていると、毎晩のようにかぞえたものだった。だが、やがて、それにも飽きてしまった。そのうちに、ここを出ても、家には帰れず、依然として追放の身でいなければならないことが、だんだんわかってきた。ここと娑婆と、どちらが暮らしよいのだろう。どうもわからない。⁶¹

⁵⁹ ソルジェニーツィン『イワン・デニソビッチの一日』小笠原豊樹訳、河出書房新社、1970年、47頁。

⁶⁰ 同上、163頁。

⁶¹ 同上、213-214頁。

いつの世も、自由は人間にとって大切なものでしょう。とりわけ近代は、自由を「人間の尊厳」の基本要件に掲げました。しかし、シューホフたちはその自由を奪われています——ドイツ軍の捕虜になったからというシューホフには理解しがたい罪状によって。

名前もまた、人間の尊厳とかかわりが深いものでしょう。人は、だれしも自分の名前があり、名前を間違えられたり、忘れられたりすると、ムッとします。逆に、名前も名乗らずに通知をよこすお役所風メールなども「人を馬鹿にしている」と感じますよね。名前を呼ぶ、名前を名乗るということは人間の尊厳にかかわる事柄です。

しかし収容所では、囚人たちは名前でなく番号で呼ばれます。シューホフは III 854 という番号です。実際、この作品は当初、『III854』という題名でした。かつてザミャーチン^{シシャー}は『われら』というアンチユートピア小説で、住民がアルファベットと数字で呼ばれるユートピア国を描きましたが、ソ連の収容所でそれは日常でした。

しかし、そのことについてもシューホフはこう言うのです。前にいた北方の収容所と較べながら、「いやあ、なんといっても……ここはまだ平和だと思うよ。(……) 仕事があつても、すまなくても、夕方になりゃ帰れるだろう。それにパンの分量も百グラム多いしさ。ここなら人間が生きていかれる。特殊ラゲリといったって、名前はどうでもいいじゃないか。番号札がそんなに苦になるかい。たいした問題じゃないよ、番号札なんぞ⁶²」。

自由と名前を奪われても生きていける方がよい、とシューホフは言います。そして作者は、そう語るシューホフを批判的には描いていません。ソルジェニーツィン自身、そうした世界で八年もの時をすごしたからでしょう。

では、収容所に生きる人々に尊厳はあるのかと言えば、ソルジェニーツィンは「ある」と答えています。それが、この作品に強いメッセージ性を与えているのです。

『イワン・デニーソヴィチの一日』のどんな場面に「人間の尊さ」は描かれて

⁶² 同上、84頁。

いるでしょうか。一例として、囚人仲間への信頼と憐みの描写を見てみましょう。その日の晩、シューホフは、偶然手に入れた鉋の破片を、看守に見つからないようにマットレスの中に隠します。金属片を石で研げば便利なナイフが作れるからです。囚人が刃物に類するものを持つことは禁じられていますが、生活上の便利さには代えられません。

[寝台の] 上段の近所の連中、つまりバプチスト教徒のアリョーシカや、通路のむこうのエストニア人の二人組は、シューホフを眺めていた。しかし、この連中は信用がおけるから大丈夫だ。

べそをかいたフェチュコフが、バラックに入ってきた。すっかり背をまるめている。くちびるに血がついている。きっと、晩めしのことで、また殴られたのだろう。だれの顔も見ず、涙を隠そうともせず、フェチュコフは通路を歩いて行って、上段の寝床に入り、マットレスに顔を埋めた。

思えば、きのどくな男である。きっと刑期の終りまで体が保たないだろう。どうしてもここの生活に適應できないのだ。⁶³

シューホフは鉋の破片を隠すところを何人かの囚人に見られていますが、「この連中は信用がおけるから大丈夫だ」と簡単に済まします。一方、彼はフェチュコフという男を好きませんが、それでもべそをかいているのを見て可哀そうに思います。これらは同胞への信頼、同胞への憐みと呼んでいいでしょう。ただし、その信頼や憐みは、個人と個人のあいだに生まれる意志的・主体的なものというより、集団的・共同体的な——ここでは「ラーゲリ的」な——ものです。つまり、シューホフでなくとも、だれが信用できてだれが信用できないかくらいは分かる（そうでなければラーゲリでは生きていけない）し、大の男がべそをかくのを見れば、普段は嫌いな相手でも憐れに思う。そうした感情を抱き合うことが、生命以外のすべてを奪われた人間の最後の尊厳のしるしだ——ソルジェニーツィンはそう伝えたかったのではないのでしょうか。

晩年のソルジェニーツィンは、ロシア性ということ語りすぎる傾向があり

⁶³ 同上、195頁。

ましたが、このデビュー作では、シューホフがどの民族の囚人とも分け隔てなくつき合うようすを描いています。「諸民族の友好」はソ連の掲げるスローガンの一つでした。それは政治的イデオロギーにすぎない面もありましたが、真実の理想も含まれていました。そうした理想を主人公に託したという点で、ソルジェニーツィンもまたソ連的作家だったと言えるでしょう。

読書ガイド

アレクサンドル・ソルジェニーツィン『イワン・デニーソヴィチの一日』木村浩訳、新潮文庫、1963年。

アレクサンドル・ソルジェニーツィン『イワン・デニソビッチの一日』、小笠原豊樹訳、河出書房新社、1970年。

アレクサンドル・ソルジェニーツィン『イワン・デニーソヴィチの一日』染谷茂訳、岩波文庫、1971年。

RFラジオ編『日本よ何処へ行く：ソルジェニーツィン滞日全記録』、原書房、1983年。

岩本和久「ソルジェニーツィンの、あるいはロシア文学の終わり」、野中進他編『ロシア文化の方舟 ソ連崩壊から二〇年』東洋書店、2011年、83-90頁。